

特集  
Preconception Care  
—健やかな母子となるための最新トピックス—

女性の健康とプレコンセプション(4)

悪性腫瘍

近藤 英司\* / 前沢 忠志\*\* / 池田 智明\*\*\*

Summary

わが国における悪性腫瘍合併妊娠は、妊娠・出産年齢の高齢化と若年者の悪性腫瘍罹患率の上昇に伴い増加している。①妊娠初期の悪阻、下腹痛、体重減少と進行悪性腫瘍の自覚症状である嘔気、腹痛、体重減少等が類似していること②妊娠のために画像診断が避けられることから診断が遅れること③産婦人科医が非婦人科腫瘍の診断に習熟していないことが非婦人科腫瘍の診断が遅れ進行してから発見される症例がある理由である。また全体では41%に新生児集中治療室(NICU)への入院が必要であり、化学療法を使用する頻度が年々増加傾向にある。

Key words

悪性腫瘍  
妊娠  
化学療法  
がんサバイバー  
AYA 世代

はじめに

わが国における悪性腫瘍合併妊娠は、妊娠・出産年齢の高齢化と若年者の悪性腫瘍罹患率の上昇に伴い増加している。厚生労働省による人口動態統計1985~2016年の出産年齢の変化を図1に示す<sup>1)</sup>。1985年では25~29歳が最も多かったが、2016年では30~34歳にピークがあり、さらに35歳以降は1985年に比べ倍増している。また近年、がんに対する診断および集学的治療の進歩による治療成績向上の結果として、がん罹患しても治療により寛解にまで至り、長期生存できるがん克服者(がんサバイバー)が増加している。そのため以前よりも悪性腫瘍を合併した妊婦の治療またはがんサバイバーに対するプレコンセプションの重要性が増している。実際、治療法の進歩により、乳がん stage I・II期でも5年相対生存率は90%を超えている。また小児・AYA世代(adolescent and young adult, 思春期・若年成人は15~20歳代, 30歳代を指すことが多く, ここでは15~39歳とする)の妊孕性温存も重要である。2009~2011年にかけてのAYA世代のがん罹患率は15~19歳で14.2, 20歳代で31.1, 30歳代で91.1(人口10万人あたり)である。これらの罹患率をわが国全体の人口にあてはめると、1年間にがんと診断されるがんの数は小児(0~14歳)で約2,100例, 15~19歳で約900例, 20歳代で約4,200例, 30歳代で約16,300例と推計される<sup>2)</sup>。妊娠とがんおよびがんサバイバーが今後の妊娠を希望した場合の注意点および妊孕性温存療法を中心に述べる。

Eiji Kondo, Tadashi Maezawa, Tomoaki Ikeda  
三重大学医学部産婦人科, 講師\*, 助教\*\*, 教授\*\*\*